

主の奉仕の精神

2008.07.06(日)

吉祥寺・福音集会にて

ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

出エジプト記 32章30節から35節

翌日になって、モーセは民に言った。「あなたがたは大きな罪を犯した。それで今、私は主のところへ行って行く。たぶんあなたがたの罪のために贖うことができるでしょう。」そこでモーセは主のところへ戻って、申し上げた。「ああ、この民は大きな罪を犯してしまいました。自分たちのために金の神を造ったのです。今、もし、彼らの罪をお赦しくだされるものなら――。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください。」すると主はモーセに仰せられた。「わたしに罪を犯した者はだれであれ、わたしの書物から消し去ろう。しかし、今は行って、わたしがあなたに告げた場所に、民を導け。見よ。わたしの使いが、あなたの前に行く。わたしのさばきの日にわたしが彼らの罪をさばく。」こうして、主は民を打たれた。アロンが造った子牛を彼らが礼拝したからである。

ローマ人への手紙 9章1節から3節

私はキリストにあって真実を言い、偽りを言いません。次のことは、私の良心も、聖霊によってあかししています。私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。

私たちは今、一緒に何回も「愛するイエス様」と歌いましたね。私たちは本当の意味でイエス様を愛しているのでしょうか。もちろんイエス様の存在を認めていますし、イエス様を信じています。けれど、本当にイエス様を愛しているのでしょうか。

私たちがどうしてイエス様のものになったのかと考えてみますと、積極的に求めたからではありません。全く予期することなく救われたのではないのでしょうか。では何のために救われたのでしょうか。それは「主に仕えるため」なのです。さらに私たちが、どのような気持ちで仕えるかということも大切なことです。私たちが中心になりたいのか、それともたとえ自分が無視されたとしても、やはり「イエス様だけ」が中心になっていただきたいか、いずれかによって決まるものです。

今、司会の兄弟が読まれました二箇所を見ると、主に仕える二人のしもべたちがどのような精神で主に仕えたか、記されています。モーセとパウロは、おのおの旧約聖書と新約

聖書を代表する偉大な人物でした。ですから、二人がご奉仕に対してどのような態度をとっていたかを読み取ることは、本当に大切なのではないかと思います。言うまでもなく、それは彼らのうちに「主の霊」が働かれたので、彼らの動機は「主の栄光」だけを求めたのでした。パウロとモーセの言葉は、この出エジプト記 3 2 章、またローマ書 9 章 2 節に書かれていますが、二箇所とも祈りの言葉です。この言葉を通して、主のみこころにかなった奉仕の精神がどのようなものであるかを知ることができるのではないかと思います。

このみことばを読んでいきますと、直感的にピンとくることは、モーセもパウロも、全く自分に死に切っているということです。モーセは、「同胞のためなら、いのちの書から私の名が消されてもかまわない」と告白しただけではなく、祈ったのです。主に頼んだのです。パウロは、「同胞の民のためなら、自分は呪われてもかまわない」と祈っています。

この二人のように、おのれに死に切った人がほかにいるでしょうか。主はこのような人々を今日も探し求めておられます。二人のしもべは、全く自分のことを大切にしようとしなかった、自分自身のことを忘れた、自分の目的も、自分の願いも、自分の利益も全く心の中にありませんでした。主に選ばれた者、つまり「まことの教会」が、モーセとパウロのすべてでした。自分の祝福、自分の義、自分の誉れ、それらは全く二人にとっては問題ではなかったのです。別の言葉で言いますと、「主の教会」「主にある兄弟姉妹」は、モーセとパウロの「いのち」であり、また「すべて」でした。この二人は、自分の持ち物、自分の時間、自分の力、自分のいのちは「主のからだなる教会のためにあるのだ。主にある兄弟姉妹のためにあるのだ」と堅く信じていました。もし信じる兄弟姉妹が霊的に成長せず、また悩み、苦しみをもち続けているのにもかかわらず無関心に過ごして、とりなすことも、またサタンの前に立ちほだかって守ろうとすることをしようとしなければ、自分の生き甲斐はないと、この主のしもべであるモーセとパウロはイエス様からいただいた愛に燃えていたのです。

主のしもべの心のありかたとは、いったいどのようなものなのでしょうか。主が私たちにもぜひ与えたいと思っておられる精神とは、いったいどのようなものなのでしょうか。

四つの点について一緒に考えたいと思います。

* 第一番目、モーセとパウロの内に宿った主の霊について

出エジプト記 3 2 章 3 2 節

「今、もし、彼らの罪をお赦しくだされるものなら——。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください。」

ローマ人への手紙 9 章 3 節

もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。

もちろんこの精神とは、生まれつき与えられた能力ではありません。二人の内に宿った「イエス様の霊」です。

モーセとパウロの祈りを読むと、二人にはいろいろな点で共通しているところがあるのではないかと思います。二人が祈りに導かれたいきさつは、いわゆる主を知らない人々、救われていない人々、未信者のことではなかったのです。「信じる者」でした。「信じる者の罪」でした。

「イスラエルの民」つまり主によって特別に選ばれた選民は、エジプトから救い出されました。これはもちろん新約聖書では、主に選ばれて罪赦され、救いの確信をいただいた、主を信じる兄弟姉妹を表わしています。主なる神のあわれみにより、エジプトから救い出されたイスラエルの民が、まもなく主の恵みをすっかり忘れてしまいました。モーセがシナイ山に入っている間にとんでもないことをしてしまいました。モーセの来るのが遅いと言って、アロンの導きにより金で子牛の偶像を造り、「これは私たちをエジプトの国から導き上った主である」と言って、子牛を礼拝するということをしました。考えられないことです。まことの神を信じて、心から賛美し真心から礼拝した人々が、偶像礼拝者になってしまったのです。モーセは罪を犯したこの民のために祈っています。モーセは主のもとに帰って、そして祈りました。「今、もし、彼らの罪をお赦しくだされるものなら——。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物（いのちの書）から、私の名を消し去ってください」と。

そしてローマ書9章を読むと、同じようなことが書かれているのではないのでしょうか。イスラエルの民は、主から離れ、主に背き、ついに主のひとり子であられるイエス様を十字架につけ、考えられない罪を犯してしまいました。この恐るべき罪を犯した民のために、パウロは祈っています。「もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、呪われた者となることさえ願いたいのです」と。

この祈りを読んでいくと、モーセとパウロは愛するに値する者のためにとりなしているわけではありません。悪魔と結びつき、罪を犯して愛するにも愛することができないような民のために祈っているのです。このことを考えると、私たちの心に何か教えられるものがないのでしょうか。私たちが愛してその愛に答えてくれる人々のために奉仕することは、もちろん簡単です。モーセとパウロの場合は、少しだけではなく全く違いました。モーセとパウロの愛に全く応えてくれない人々を愛し、愛して愛し抜いた二人でした。私たちも主のもとから離れていった兄弟姉妹に対して、同じ心の態度を持つべきではないのでしょうか。

モーセとパウロには、その他の点でも共通している点があります。それはモーセもパウロも、心からその人々を愛してすべてをささげたため、誤解され、いじめられたのです。

イスラエルの民には全く感謝の気持ちがなかったのです。モーセは、イスラエルの民をエジプトから解放しようと思いついた時、やはり民に誤解され、自分の身に危険を覚えて

逃げなければならなかったのです。結果として、四十年間荒野の中で生活するようになり
ました。また民を導いて荒野をさ迷った後四十年の間、モーセはどれほどイスラエルの民
に誤解され、主を信じる者に誤解され、民から苦しみを受け、民のために悩んだかわかり
ません。

パウロの場合も、モーセと同じでした。信仰を同じくするイスラエルの民によっていじ
められ、迫害され、誤解され、悪者のように取り扱われました。しかし、この二人の神の
しもべは、自分を理解してくれない人々のために自らの生涯を与え尽くし、ささげ尽くし
たのです。モーセは、自分をいじめ抜いた民であることをよく知りながら、今、主の前で
取りなしています。「今、もし、彼らの罪をお赦しくださるものなら——。しかし、もし
も、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消
し去ってください」と。彼らの罪を赦してやってくださいと祈るモーセの心の内には、民
に対する苦々しい思いは一つもありません。パウロも、主の前にひれ伏し、「もし、できる
ことなら、私の同胞、肉による同国人のためにこの私が、キリストから引き離されて、呪
われた者となることさえ願いたいのです」と。

これこそ、まことの奉仕の精神なのではないでしょうか。もちろん私たちの主イエス様
がそうでした。イエス様は呪いとなってくださいました。これは何という奉仕でしょう。
私たちの罪のために、私たちのわがままのゆえに、父なる神はイエス様を捨て、御顔を背
けられました。イエス様は一番辛いそのことにも耐えてくださったのです。イエス様はご
奉仕の間多くの人々にいじめられ、責められ、誤解され通しでした。ご自分を誤解し続け
た兄弟たちのために、十字架上の断末魔の苦しみの中で父に向かって叫ばれたのです。「わ
が神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と、切ない祈りをなさいま
した。けれども、イエス様は自分を捨てて自分を否んだ人々に対して、「兄弟」と呼びかけ
るのを恥となさいませんでした。これが、イエス様の精神でした。イエス様は、愛される
価値のない私たちのために、呪いとなってくださいました。

この主の霊は、パウロの内にも生きていました。パウロもやはり、民のためならこの身
は呪われてもかまわないと心から祈ったのです。私たちはこの主の標準からなんと遠く離
れているのでしょうか。主イエス様の霊が彼らの内を支配することがおできになったので、
このような態度がとれたのです。

*第二番目、主のご目的を実現するための戦いについて

ここまで出エジプト記3 2章とローマ書9章から、モーセとパウロの祈りを考えてきま
したが、ここで出エジプト記3 2章とローマ書9章の前にどのようなことが起こっていた
か、少し見てみましょう。

出エジプト記3 2章の前の3 1章は、本当に素晴らしい書です。モーセはシナイ山に入

り、そこで主との親しい交わりを持ち、主から幕屋のひな形を見せられました。シナイ山は啓示の山です。啓示された幕屋は、言うまでもなくイエス様ご自身を象徴するものです。主は、ご自分が住まおうとなさる幕屋の模範をモーセに示されました。主はモーセに示された幕屋にお住みになり、ご自分の栄光を現わされたかったのです。モーセにとって幕屋が上から示されたということは、素晴らしい体験でした。しかし、示された幕屋の建設はすぐにはできませんでした。32章を読みますと、民が罪を犯して墮落したことが書かれています。モーセにとっては、これは大きな悩みであり、考えられない苦しみであり、また戦いでした。主のご目的を実現するには、いつも戦いが伴います。

同じくローマ書8章を読むと、これも出エジプト記31章に劣らず、素晴らしい書です。みなさんよくご存じですが、もう一度部分的に読みましょう。

ローマ人への手紙 8章1節、2節

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。

17節

もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人でもあります。

18節

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。

28節から39節

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・

イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。私たちがキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。」と書いてあるとおりです。しかし、私たちは、私たちが愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちが引き離すことはできません。

このローマ書8章を読んでいくと、私たちは高い所へ思わず知らず引き上げられて行くような気がします。この章を読んでいくと、主の永遠からのご目的が明らかになります。今読みましたように、

29節、

神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。

これが主のご目的です。

続いて12章4節、5節には、ご目的の実現について書かれています。

ローマ人への手紙 12章4節、5節

一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。

しかし、このローマ書8章と12章の間には、非常に暗いことが書かれています。すなわちイスラエルの民が主を離れ、油そそがれ約束された救い主であるイエス様を十字架につけて殺してしまったという、悲しむべき陰惨な出来事が書かれています。

モーセとパウロは、二人とも素晴らしい神の奥義を上から示されました。すなわちモーセは神の家である幕屋を教えられ、パウロは神の宮であるまことのからだなる教会を教えられています。しかし、二人ともこの主のご目的を示されてそれを実現するまでの間には、大変な戦いがありました。それは主のご目的が達成されるための本当に激しい戦いでした。出エジプト記32章を見ると、悪魔は荒れに荒れて主のご目的を挫折させてしまおうとしていることがよくわかります。偶像礼拝の霊が、当時の救われたイスラエルの民の中に入ってきました。民は金の子牛に礼拝をささげました。まことの主から離れてしまいました。悪魔は今、私たちの生まれながらの性質を用いて、主のご目的が実現されないように働きかけています。もし私たちが自分の弱い点に気づくなら、そのまま主に今から直ちにすべ

てをゆだねましょう。自分を尊び、装って、正直な心で主の前に出ようとしなない人は、主を否定することになります。主の御前では私たちは貧しい者であり、みじめな者であり、哀れむべき者であり、目の見えない者であり、裸な者です。主にすべてをささげ、私たちの内に、私たちを通して主に働いていただきたいものです。

主の宮はいったいいつ建てられるようになったのでしょうか。恐ろしい戦いの後でした。すなわち、偶像礼拝者を除くという恐ろしい戦いの後でした。モーセとレビの子たちは、偶像を拝んだ人たちを除かなければならなかったのです。

出エジプト記 32章25節から29節

モーセは、民が乱れており、アロンが彼らをほうっておいたので、敵の物笑いとなっているのを見た。そこでモーセは宿営の入口に立って「だれでも、主につく者は、私のところに。」と言った。するとレビ族がみな、彼のところに集まった。そこで、モーセは彼らに言った。「イスラエルの神、主はこう仰せられる。おのおの腰に剣を帯び、宿営の中を入口から入口へ行き巡って、おのおのその兄弟、その友、その隣人を殺せ。」レビ族は、モーセのことばどおりに行なった。その日、民のうち、おおよそ三千人が倒れた。そこで、モーセは言った。「あなたがたは、おのおのその子、その兄弟に逆らっても、きょう、主に身をささげよ。主が、きょう、あなたがたに祝福をお与えにするために。」

「敵の物笑いとなっているのを見た」。つまり証し人にならなかったのです。

私たちの場合も同じだと思います。心の偶像が取り除かれ、自分の利益、自分の考えを主の前に恥じるようになって初めて、主の宮が建て上げられていくのです。それまでの間には戦いと悩みがあります。

パウロは、ガラテヤ人のために同じように戦いました。ガラテヤ書を読むと、パウロがガラテヤ人のために恐るべき戦いをしたことがわかります。ガラテヤ人たちは誤ったユダヤ教に足を踏み入れてしまい、掟に縛られ、その霊的状态は荒野をさまざめたイスラエルの民のように荒れに荒れてしまいました。主のご目的が実現されていくところには、いつも戦いがあります。主のご目的は、ご自分の住む家であるまことのイエス様のからだなる教会を建て上げることです。エペソ書1章23節に、そのことがはっきりと書かれています。エペソ人への手紙 1章23節

教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。

この教会が実現すると、あらゆる問題はたちどころに解決するようになります。この教会が建て上げられていくには多くの悩みや苦しみや誤解が伴うでしょう。しかし、栄光に満ちた主の教会が建て上げられていくことを確信します。

今まで、二つの点について考えました。

第一番目、モーセとパウロの内に宿ったイエス様の霊

第二番目、主のご目的を実現するための戦い

*第三番目、すべてをささげることの必要性

主のご目的を、私たちは上から教えられて知っているのでしょうか。主がモーセとパウロに示されたように、私たちにも既に示してくださったのでしょうか。そして、その主のご目的が達成されるように、私たちの「すべてをおささげしている」のでしょうか。

「すべてを主におささげすること」は、本当に大切です。「すべてをおささげする」とき、自らの利益、立場、名誉、それらのものはどこかへ行ってしまいます。主のご目的が何であるかを心の目で見て「すべてを主におささげする」とき、教会が「その人のいのち」となり、「すべて」となるはずです。

モーセはイスラエルの民を思い、主の教会を思うあまり、主の御前に心を注ぎ出して祈りました。「今、もし、彼らの罪をお赦しくださるものなら—。しかし、もしも、かないませんなら、あなたのお書きになった書物から、私の名を消し去ってください」と。イスラエルの民が立ち直るか、または自分が駄目になるか、どちらかを主に迫っているモーセの姿が目映るような気がします。すべてを主にささげ主の家を思うとき、二つの道を選び取ることはできません。私たちを通して主の家が建て上げられるか、あるいは自分が駄目になるかのどちらかです。

主が私たちを通して、思うがままに働くことがおできになるように、自分で何か役割を演じようなどとは思わないようにしましょう。自らは何の価値もない者だからです。

モーセは、この祈りの中で言っています。「自分は大した者ではない。本当は役に立たない。私の救いや私のいのちは必要ではない」と。パウロは、もし、主のみこころが信じる同胞のうちになされていかないなら、私は何のために救われ、何のために生きているのかわからないと言っています。

主は私たちに、主のみこころの全部を、主イエス様のからだなる教会に傾けておられることを示してくださったのです。もし、吉祥寺の集会、いたるところの集会が、主のみこころのままに主によって建て上げられていかないなら、たとえば私が日本に来たことも、いろいろなことで悩んだことも、全く意味がないのではないのでしょうか。

私たちは何のために救われたのでしょうか。何かを得るためなののでしょうか。天国に入るためなののでしょうか。いろいろな祝福をいただくためなのでしょうか。残念ながら多くの人々は、そのために救われたのだと考えています。けれど決してそうではありません。

私たちは、「主のご目的を成し遂げる主のしもべとなるため」に、救われました。この主

のご目的を成し遂げるには、いろいろな値を払わねばなりません。主の家を建て上げるという主のご目的を成就するには、いのちをもささげなければなりません。イエス様は次のようにおっしゃいました。よく知られている箇所です。

マタイの福音書 16章25節

いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。

主のからだである兄弟姉妹のためなら死もいとわない、兄弟姉妹は自分のすべてであると思うまでに、主イエス様と一つになっているのでしょうか。主の家である教会、主にある兄弟姉妹が、一人一人のすべてとなっており、この霊的知識がいのちとなっているのでしょうか。

この「主の家を建て上げたい」という願いは、モーセとパウロの「すべて」でした。この二人は、ご奉仕に際しても自分の名誉を求めず、ただ主を思い、エペソ書5章27節のように、主の教会を建て上げるためにいのちをかけていました。

エペソ人への手紙 5章27節

ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。

パウロは、そのためにも祈りの中で戦いました。パウロの気持がよくわかります。

コリント人への手紙・第二 11章2節

私は神の熱心をもって、熱心にあなたがたのことを思っているからです。私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。

「あなたがた」とは、主の恵みによって導かれ救われた兄弟姉妹です。

パウロと同じように、この目的を持ってご奉仕しなければ、主は私たちを悲しく思われることでしょう。主は、モーセやパウロと同じように、私たちを通してご自分のご目的を達成されるために私たちを救ってくださったのです。このように主に仕える準備が整っているのでしょうか。このまことの奉仕は、死に至るまで従順に主にお従いして行く奉仕です。

***第四番目、まことの奉仕に必ず伴う火のような試みについて**

主のしもべたちは、特別に激しい試みにあったことがあると告白しています。私たちが救われるためには、もちろん苦しみがなかったのです。救われるために私たちは何の値も払いませんでした。全部ただなのです。「恵み」でした。しかし、救われて神の子として歩み始めたそのときから、いろいろな悩みが、また苦しみが、襲って来ました。これはいったいどういうわけでしょうか。それは私たちがただ救われるために救われたのではなく、

「奉仕するために救われた」からです。

私たちは、「主に用いられるしもべ」となるべきです。しかし、自分を無にしない限り、「主のしもべ」となることはできません。自分を無にするには激しい試みを通されなければなりません。自らを喜ばせ自らを愛する心が、なんと多く私たちの内に残っていることでしょう。ですから、主は奉仕を妨げる私たちの自我を取り除くために、いろいろな悩みや苦しみの中を通されるのです。

私たちは偉大な主の仕え人であられる主イエス様を見上げましょう。上着を脱ぎ、タオルを手にし、たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗ってくださったイエス様を見上げたいものです。これは、しもべ、当時の奴隷のした仕事でした。イエス様はそのような態度をとられたのです。おのれを空しくされました。自らの名誉も名前も利益もお考えにならなかったのです。これこそ、本当の奉仕の精神です。マタイ伝20章28節を読むと、イエス様は証しとして、次のようにおっしゃいました。

マタイの福音書 20章28節

人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」

と。

これは、イエス様の証しであり告白です。イエス様は、まことの父なる神のしもべであられました。私たちもまことの主のしもべとなるためには、すべてを主におささげしなければならぬはずです。いのちさえささげなければなりません。すなわち、自分の自我をささげなければ、自分の意志をささげなければなりません。そのためには、多くの悩み、苦しみ、困難を通らなければなりません。この試みを通ったとき、まことの主のしもべになっていくのです。

民数記 12章3節

さて、モーセという人は、地上のだれにもまさって非常に謙遜であった。

と書かれていますが、モーセがこのように言われるようになるまでには、想像に絶する試みを通されたのです。御霊は、歴代誌上6章49節に「神のしもべモーセ」と、モーセを呼んでいます。同じ御霊はパウロに対して、「イエス・キリストのしもべ、パウロ」と呼んでいます。パウロは地にひれ伏し、心から祈りました。「もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、呪われた者となることさえ願いたいのです」と。これが、主が私たちにも与えようとしておられる精神なのではないでしょうか。

了